

レ
イ
ン
ボ
ウ
の
瞳

学校教育学部障害児教育講座

谷本忠明

米国にはヒアリングドッグ（聴導犬）と呼ばれる耳の不自由な人々のための犬がおり、四十九の州で盲導犬と同じに扱われている。訓練施設は全米に十数ありあるが、そのうちの一つを紹介する。

野犬たちの第二の人生

ボストンの西約三十五キロのストウという小さな町に聴導犬センター「レッド・エーカー・ファーム」

がある。新緑に囲まれたこのセンターを私が訪れたのは昨年の六月であった。

犬舎には訓練期間中の五頭の犬がいた。一頭を訓練するのは四か月から六か月、経費も約三千五百ドルかかるため、民間の寄付によって運営され、スタッフの数も限られているセンターとしては一度に五頭を扱うのが限度であるという。ここ

の犬の多くは、ボストンにある動物保護施設に収容された野犬の中から選び出されている。したがって、聴導犬の種類や大きさは特に決まっていない。

聴導犬のあかしーオレンジ・リーシュ（手綱）

聴導犬は、目覚し時計や電話の音、煙感知器の音など、生活上聞こえないと困る音を知らせてくれる。たとえば、目覚し時計が鳴った場合には、両手（足？）を主人の胸の所に置いて起こしてくれ、電話などの場合には、音源と主人との間を往復し、その位置を知らせてくれる。その他、希望すれば、赤ちゃんの泣き声やヤカンのお湯が沸騰した時の音などに反応するようセンターで訓練してくれる。

犬は原則として無償である。犬の提供を受ける人は、専門職員の指導のもと犬と一緒にセンターで一週間、さらに一週間を自宅で過ごし、扱いに慣れる。その後、一定期間において職員によるチェックが行われ、訓練された行動が確実にできることが確認されれば、その犬が正式に引き渡される。この際、センター発行の犬の身分証明書とオレンジ色の手綱が与えられる。この手綱をつけていれば聴導犬として法的に保護され、公共交通機関の利用はもちろん、レストランやスーパーマーケットなどにも連れて入ることができる。

退役犬レインボウ—その瞳が語るもの

このセンターには、現役を退き、スタッフに飼われて静かな余生を送っているレインボウという犬がいる。このセンターの第一号の聴導犬である。長い間センターの顔として州知事をはじめ多くの人々の前で実演してきたという。じつと休んでいるレインボウのそばに行き、初めて彼の瞳を見たとき、私は何とも言えない安心感と感動を覚えた。その瞳はまるで何かを語りかけているようで、単なる犬と人間という関係を超越しているようにさえ思えた。どうしてそう感じたのかはよくわからない。ただ、あれほど美しく澄んだ瞳を見たのは初めてのような気がした。

耳の不自由な人々にとって、聴導犬は単に音を知らせるだけの犬ではない。それは、聴導犬を得た人々が一様に自分の心の支えとして、大事な家族の一員として聴導犬を受け止めていることに現れている。現在、生活上の様々な音の存在を耳の不自由な人々に知らせる機械も作られている。しかし、それでもなお多くの耳の不自由な人々が聴導犬の提供を待っているという事実は、単に犬好きの国民性というよりも、そこに機械がとってかわることのできない何かがあることを教えてくれているように思う。レインボウの瞳は今も私の中に鮮明に残っている思い出の一つである。

